

圖像より見たる親鸞聖人

橋 川 正

現存する親鸞聖人の圖像眞影は殆んど無數であるが、近時西本願寺に藏する鏡の御影の史的ならびに藝術的價値の一般に認められてより以來、聖人の確實なる影像の標準を得ることゝなつた。鏡の御影についてはさきに法爾第一號誌上に妻木直良氏がその歴史的價値上より解説され、その藝術的價値に關しては吾々が隨時述べたところであるからして今それを繰返さうとは思はぬ。又昨年辻博士が調査報告中官報七月十九日に鏡の御影に言及され、世の注意を喚起されたことは吾々の新しき記憶に存するところである。この鏡の御影を標準として聖人の影像として信せらるべきものを求めるならば西本願寺藏の安靜の御影、三河國妙源寺藏三幅光

明本尊中の聖人の影像、仙臺市東北別院所管の同じく光明寺本尊中の聖人の影像などを數へることが出来る。伊勢國高田專修寺の聖人木像も亦その一つであるといふが、未だ親しく接する機會がないから今の場合暫く保留しておかねばならぬ。これらの影像中の中安靜の御影については鷲尾敦導氏が無盡燈誌上で發表されたから第二十一卷第七號詳しくことはそれに譲つておかう。妙源寺の影像はかつて親鸞と祖國第一卷第十一號にその復寫を掲げて短かい解説を施しておいたところであり、仙臺の影像は眞宗大系第十八回配本卷頭にその寫眞を載せて「現存ノ光明本中最古ノモノト信ゼラル、光明本ヨリ採レルモノニテ遅クトモ南北朝初期ノ圖畫ニカ、ルモノナ

リ。カノ史家ニ珍重サレツ、アル西本願寺所藏ノ鏡ノ御影ニ酷似スルヲ以テモ、コノ御影ガ親鸞聖人ノ御影ノ最モ原始的ナルモノ、一タルヲ知ルベシ」と解説されてゐるところである。要するにこれらの影像是既に悉く刊行物の上に發表されたのであるから、今正にこれらを總括して研究を試むべき時機に到達して居るのである。それに先だつて少し注意せねばならぬことは、鏡の御影を除くの外はすべて坐像であつて、立像は鏡の御影のみである。それから妙源寺の影像だけは右向であるが、他は皆左向である。これらによつて聖人影像の立像坐像右向左向を網羅して居るのである。右向左向の相違については説明せねばならぬこともあるが、今は略しておかう。眞宗故實傳
來鈔參照又光明本尊についても述べねばならぬが、聖人の影像だけが必要であるのであるから略しておかう。但し妙源寺の光明本尊と仙台の光明本尊と比較してその時

圖像より見たる親鸞聖人

代を鑑別するならば、殆んど同時代であるけれども妙源寺のものの方が仙臺のよりも更に古いと考へる。その理由は「札」の文字を見ると仙臺の方には「親鸞聖人」(上部が剝落してゐるけれども明かに判讀し得る)とあるのに對して、妙源寺には「親鸞法師」と記されて居る。これが安靜の御影裏書(蓮如上人の筆と稱す)の「親鸞法師眞影」といふのと一致するのであつて、この裏書はそもと明かに存覺袖日記から出て居るのである。存覺袖日記には「御表書云」として「親鸞法師眞影」と記載し、文和四年(南朝正平十年)八月二十五日に參河安城の照空房が上洛した砌、存覺自ら隨喜の涙を拭うて拜見したと明記するところであるかくの如く妙源寺の影像の札が安靜の御影の裏書ならびに存覺袖日記に一致するばかりでなく、仙臺の光明本尊が親鸞聖人以下釋眞佛釋明空及び他に不明の一人あはせて三人の眞像を描くに對し

て、妙源寺の光明本尊は源空聖人、法印聖覺、信空法師、親鸞法師で終つて居る點からいつて、仙臺のものよりも妙源寺のものの方が更に古いと思はれるのであつて、妙源寺の三幅光明本尊は現存するものゝ中恐らく最も古いものと見ることが出来るやう。

なほこの他各地に存する光明本尊中の聖人の影像なども参照して聖人の圖像の特徴を擧げると(一)袈裟の小威儀が大威儀と共に肩の上にあげてあること(共に白色)(二)法衣袈裟の色が暗灰色なること(三)頸に帽子を巻いて居られることなどである。然し帽子を巻くことは法然上人の影像にも見るのであるから、特徴とするにも當らぬから除外するとしても、空善日記第二十五條参照前二條は聖人の影像の著しい特徴とすべきである。第一條は現に墨袈裟と同じかけ方であるが、光明本尊に於て特に際だつて注目せらるゝのである。法然上人にしても

聖覺・信空にしても總て今日五條袈裟を着用するのと同じく大威儀は肩に小威儀は腕にあるのと違つて、親鸞聖人の影像にあつてはすべて肩上にもつて行かれて居る。然しこの例は他に全く無い譯ではないのであつて、一遍聖人繪詞、法然上人行狀書圖(勅修御傳)を見ても行道の場合などには小威儀を肩の上にもつて行つてある。六波羅密寺藏の清盛僧形木像や藤澤清淨光寺藏の他阿上人木像なども亦同様であつて、鎌倉時代前後にその例があることはあるが、親鸞聖人の信すべき影像が悉くかくの如き袈裟のかけ方であることは注意すべきであつて、聖人がどこ迄も威儀を本とせず無戒名字の比丘として簡單なる服裝を好まれたことを思はしむるのである。人目を驚かすやうな絢爛たる袈裟を用ひられなかつたことはいふ迄もないが、その材料からいつても決して立派な綾羅ではなくして粗末な布であつたに違ひない。單純素材

なつゝまやかな一生を送つた聖人の面影はこの袈裟の上にも遺憾なく現はれてゐるのである。

次に法衣の袈裟の色については素描の鏡の御影に徴することは出来ないが、上に擧げた信すべき聖人の影像を通觀して暗灰色なることは明かである。衣の色については既に改邪鈔に「遁世ノカタチヲコト、シ異形ヲコノミ裳無衣ヲ著シ黒袈裟ヲモチキルシカルベカラザル事」といふ項があつて「末法燈明記ニハ末法ニハ袈裟變ジテシロクナルベシトミヘタリシカレバ末世相應ノ袈裟ハ白色ナケリ。當世都鄙ニ流布シテ遁世者ト號スルハ多分一遍房他阿彌陀佛等ノ門人ヲイフ歟、カノトモガラハム子ト後世者氣色ヲサキトシ、佛法者トミヘテ威儀ヲヒトスガタアラハサントサダメ振舞歟、ワガ大師聖人ノ御意ハ、カレニウシロアハセナリツチノ御持言ニハワレハコレ賀古ノ教信沙彌ノ定

圖像より見たる觀變聖人

ナリト云云」と述べられて居る。末法燈明記は觀變聖人が教行信證文類に引用せらるゝところであつて、「千三百年袈裟變白」と記され、改邪鈔の右の文は正しくこれを指して居るのである。即ち佛陀の時代より遠ざかるに従つて、袈裟の色も漸次變化し、末代濁世の表現を袈裟の色にも見るといふのである。(但し聖人の袈裟は白色でなく、法衣と同じく暗灰色である。黒色の褪せた感じのものとも見られやう。)けれども聖人の無戒名字の比丘としての非僧非俗生活は、一面一遍流の後世者遁世者佛法者に伍することを厭離するのであつて、聖人の晩年生活が明遍系統の人々たとへば松影の助阿など、多少交渉するところがあつたにしても聖人自身は決して明遍系統の人々と肝膽相照した譯ではなからう。聖人は究極あるがまゝの現實生活に隨順されたのであるから、遁世者後世者とは全くその根柢を異にするのであつて、この點は嚴

密に見きはめておかねばならぬ。聖人は敎信沙彌をその先驅として、その跡を追はんとされたのである。それであるから、その服裝の如きも、敎信沙彌の遺風に倣はれたのであらうとは、無理からぬ想定である。この想定は單に漠然たる想定ではないのであつて、これを一の事實として生きしめたのが實に蓮如上人である。吾々は次に述べるやうな蓮如上人の言葉から顧みて、親鸞聖人の服裝上の主義をたしかめると同時に、これを信すべき影像に徴して愈々その確實なることを知るのである。

慧空の叢林集に「法衣裝束」といふ項目を特に設け卷七、作法次第と連署記を引用し、法衣の色の薄墨なることが力説されてゐる。この作法次第とは實悟の本願寺作法之次第であつて、その眞蹟本を現に東本願寺に傳へて居る。而してこの作法之次第なるものは、實は實悟記の原本であつて、そ

の内容からいへば全く異名同本である。而してその眞蹟本には些かも實悟記の名は見えぬのであつて、實悟記の名が後人の稱呼なることを因みにいひ添へておかねばならぬ(挿入圖版參照)この作法之次第によると

一直綴などの墨染の色くろき不可然候とてふかく曲言之由蓮如上人は仰事候き……いかにもく營流の儀はうす墨なるが肝要候と被仰、敎信沙彌の作法なるべきと常に被仰し也。

これは實悟記でいへば第九十五條であつて、敎信沙彌の作法を學んで薄墨の法衣を用ふることをば實に宗祖の遺風として蓮如上人が繼承されたのである。蓮如上人が佛法者後世者らしからぬやうにと屢々警策されたことゝあはせ見て、親鸞聖人の傳燈者としての蓮如上人に濃かに接し得るのである。この法衣の色のことは作法之次第以外なほ徴すべきものが少くない。即ち同じく實悟の筆録

した蓮如上人一期記にも

一、衣ハ墨クロニスル事然ルベカラズ、衣ハ子ズミ色ナリ、凡夫ニテ在家ノ一宗興行なれば、イヅク

迄モ上下共ニタフトゲセ

スナリ、衣ノ袖ヲ長ク、

タケヲモナガクスベカラ

ズト仰ラレケルナリ（第

九十三條）。

と見え、その他空善日記
にも殆んど同じく

一、衣墨クロニスルコト不

可然、衣ハ子ズミ色也凡

夫ニテ在家ノ一宗興行ナ

レバイヅクマデモ、上下

タウトゲセヌナリ。衣ノ

袖ヲナガク、タケヲモナ

ガクスベカラズト被仰ケ

ルナリ（第百四條）。

図版Web非公開

山科連署記（第六十二條）にも全く同様の箇條を見るばかりでなく、山科御坊事並其時代事といふ實悟の筆録の中にも

一、衣の色の事、衣の色は薄墨にて可古カコの教信の意巧を本と御まなびにて候とや開山聖人の仰にて蓮如上人の御時實如上人の御時までもうす墨にて侍りし、近代は末々の人まで黒衣になり候、蓮一の御時をのくく一家衆は外人に出合時は可レ着とて黒衣を所持候し事也、平生は黒衣着て蓮一如の御すへ出られず、殊勝の御僧の御入とぞと仰られて、いやく殊勝にもたふとくも候はす候、只彌陀の本願南無阿彌陀佛こそたふとく候へと被仰たる事にて候當時はいづれもくく一色に黒色也、開山蓮如上人の御心には難叶物にて候也。

と明白に述べて、併せて時代の推移を知らしめ最後に實悟自らの悲歎を漏して居るのである。堅

田の法住（覺念の子息）が十七歳の頃に見た夢にも「ウスズミゾノ衣メサレシ貴僧二人」が現はれて居り本福寺由來記、本福寺跡書、妙專尼も「ウスズミゾメノコロモメサレタル御ラウ僧」を夢みて居るのであるから本福寺由來記、蓮如上人の時代に薄墨染の衣が殊勝な法衣として用ひられてゐたことは疑へない。かくの如き蓮如上人時代の例より翻つて、再び上に擧げし親鸞聖人の影像を見るならば、こゝにその驚くべき一致を發見するのであつて、教信沙彌と聖人とは約四百年も時代を隔てゝ居ることであるから、教信沙彌の遺風を直接做つたのではないにしても、その精神からいへば聖人は教信沙彌の遺風に從はれたのであつて、少くとも蓮如上人はかくの如く信じて聖人の精神を傳へられたのである。以上聖人の影像に接しつゝ聊か注意に上つた點を摘記したまでであるが、叢林集、眞宗故實傳來鈔考信錄などを開けば思ひ當る節々が少くない、然

し今はなるべくそれらのものにたよらずに、直接に聖人の影像について氣付いたことを一二記したのである。(父の寂後十日夜)

◆西蔵繪畫の解説

寺本婉雅

西蔵の繪畫彫刻法は、その起源甚だ古くして有史以前(西曆三世紀前後)に溯らねばならぬ。その頃より西蔵人は迦濕彌國を通じて遠く波斯 (Sakastana 大食國) に交通し、波斯文明さては古代アッシリヤ文明を輸入し、シヤンシュン地方 (Shan-shun) より起れるトンバセンラフ (Ston-pa gsen-Rabs) に依つて唱道せられたるボンボ教 (Bon-po) を崇拜して文化の曙光を放つてゐた。かくて西蔵開國の英主スロンツァンガンボ王 (A. D. 617-700) 出で、西蔵を統一し、餘威四隣に振ひ、中央亞細亞より支那長安府に及び、トンミサンブハブの文字制定に依て西蔵國家の獨立的文化を樹立するを得た。紀元八世紀頃に造像度量名義經 (Skandagobas-

Kyi Tshad-Kyi in Tshan-Nid Ces-Bya-Va.) 丹珠爾部第百廿三函 (P. B. 23-A. 29) の將來せられしを基標として、之に燦爛たる美術を大成したのである。されば西蔵美術は印度、波斯アッシリヤ、支那の各種の美術を習得して西蔵獨特のものを創作したるより見れば、西蔵文化の優秀なることを知り得る。

今こゝに掲げたる繪畫について見る如く、西蔵書法は布地に白粉を塗抹し、尖頭の裁斷せる毛製の繪筆にて描寫するもので、一寸西洋の油繪に似てゐるが、全體としては東洋畫の特色を全面に充溢してゐる。特にこの繪畫について注意すべきことは法冠とその描法である。中央の人物の戴ける法冠はアッシリヤ武人の冠する兕形そのまゝである。これはアッシリヤの考古學上の遺物と對照すれば、何人も疑ふものはあるまい。この法冠はアジャンタ洞窟開鑿時代に印度佛敎の盛んに流用し

たるもので、龍樹の如きはこの冠を戴いてゐる。

しかも遠く我國にも流傳して、能狂言に、武人兜に、さては天台淨土教に方丈帽として、その原形の面影を殘してゐる。次にこの繪畫の中央人物の描寫法は沒線法である、これは印度アジャンタ洞窟内第九號（前一世紀前後の作）の本生譚（バーゼス此の云へる尸毗本生譚）にある貴族の風俗を描寫した輪廓に用ひたところの沒線法の模倣であることを認められるであらう。その餘の分は銳利なる描線であるが、沒線法は表はれてゐない、それは身に袈裟を、下には裳を、胴には西藏にてトシガクと稱する袖なしの襦袢を着して、何れも明代の衣袈裟の模様を寫してゐるからである。トシガクは西藏佛教の改革者宗喀巴（明永樂十五年

——成化十五年）が西藏の寒氣を防避する爲めに特に古代佛規以外に制定したる餘衣の一種である沒線法が西藏佛畫に見られることは稀有のもので

ある。その人物の唇厚鼻隆、目長頤豐、織細精緻着色の優雅典麗なる、大般若經を披いて説法の儀容を示し、前に弟子達は講説を聽き、或ひは沈思し或ひは供物を献げ、頗る自由なる筆致、濶達なる描寫に、潑瀾たる宗教的生命の漂へるを認める、げに繪畫の背景は亞細亞高原の風景を寫生し潺々たる碧流、青々たる珍草を配し、微瀾の中、廻流の邊り、淡紅白の水蓮相映じ、寶沙徹照の淨地を描寫せる大自然の曼荼羅である。右側上下の怪像は夜魔天の威徳明王にして、般若利劍の講説に恐れて遁げ去るの圖である。左に（一）繪畫上の般若經典の文と、（二）此軸の下に朱にて記せる文とを譯出する

（一）「聖智慧到彼岸經を執持し、身を全く清淨にし口を全く清淨にし、虚空界は、東方と南方と西方と北方との無邊、上下方の諸世間」

（二）「法金剛の足下に敬禮し、大法輪の加持と講義とを願へり。内外秘密の業の夜魔等を現前に捕縛し、成就する大自在者よ」。